エッセイ 千字文

バリ島の思い出

太田治子（おおた はるこ）

プロフィール
神奈川県生まれ。明治学院大学文学部卒業。1976年～79年、NHK教育テレビ「日曜美術館」の司会アシスタントを務める。1986年『心映えの記』で第1回坪田譲治文学賞受賞。主な著書に『母の万年筆』『私のヨーロッパ美術紀行』『絵の中の人生』『恋する手』『青い絵葉書』『小さな神さま』『石の花』最新刊は『明るい方へ』。

バリ島に、もう一度あいたい女性がいる。およそ十年前、当時中学生だった娘の万里子と女二人、四日間のバリ島の旅にでかけた。その時、ガイドをして下さったカディックさんである。まだ結婚まもないというカディックさんは、バリ島の日本語学校で日本語を覚えたと話していた。とても奇麗な日本語であった。何よりも、心が美しい女性だったと思う。四日間というものずっとカディックさんと行動を共にしたがいつも穏やかで優しく初対面の人に感じるあの息苦しさを一秒とて感じたことがなかった。

「太田さんは、日本の女性の感じがしません。こちらの人のように思えます」

カディックさんはそういって、私の手を握った。冷たい手だった。

「私、体温がとても低いです。おかあさんになれるでしょうか」

「それは、大丈夫でしょう」

すぐにそう答えながら、少し心配になった。こんなに冷たい手と握手したのは、初めてであった。バリ島の繁華街にあるレストランのテラスで、カディックさんと私たち母娘三人が夕食を食べている時だった。思わずレストランの壁を見上げると、一匹のやもりがじっと三人の話しに耳を傾けていた。

カディックさんは、その日私たちをとある村の籐職人の家へ案内したことを後悔しているようだった。あんなに高い値段をいってと、カディックさんは憤慨していた。バリの籐製品を買いたいといったのは、私である。

籐の持つぬくもりが好きだった。晩年の母が籐椅子でまどろんでいたことを思い出しながら、私はその椅子によく似た籐椅子をみつめていたのである。小柄な主人が近付いてきた。カディックさんからその値段を聞いて、私はびっくりした。日本のデパートで買った方がまだ安いという値段だった。勿論買わなかった。あの値段をいう時のにんまりとずるそうな目付きは、とてもバリの人とは思われなかった。バリは観光地でありながらそれはのどかで、おっとりしていたところであった。バリにも、お金もうけを第一に考える人ができていると力ディックさんはいった。

それから数年して、カディックさんと食事をしたレストランの近くでテロの爆破事件が起きた。多くの死傷者がでた。カディックさんは、大丈夫だったろうか。きっとおかあさんになって今もガイドを続けていることを、信じているのである。

月刊 みんぱく 9月号目次

1 エッセイ　千字文
バリ島の思い出　太田 治子

特集
特別展 彫刻家エル・アナツイのアフリカ
――アートと文化をめぐる旅

3 旅はエル・アナツイから始まる　川口 幸也
4 エル・アナツイに聞く　聞き手・川口 幸也
5 歴史とアートのはざまで制作すること　竹沢 尚一郎
6 圧倒的な出現性――エル・アナツイと現代美術　水沢 勉
7 アナツイ工房の職人たち　松本 尚之
8 エル・アナツイのアトリエ　渋谷 拓
9 ガーナを訪ねて　朝木 由香

10 研究フォーラム
インド大躍進の光と影
「現代インド地域研究」プロジェクト
三尾 稔

12 みんぱく Information
14 地球ミュージアム紀行
世相史を語る台湾故事館
久保 正敏
15 みんぱく 私の逸品
マヤの貫頭衣（女性用ウィピル）
園田 直子
16 散策と思索の径
よみがえる「華洋雑居」の記憶・上海
井口 淳子
18 多文化をささえる人びと
足元から多文化共生を積み上げる
世代交代した APFS の今とこれから
渡戸 一郎
20 歳時世相篇
敬老精神
鈴木 七美
22 フィールドで考える
あんたはウジャンジャ
小川 さやか
24 次号予告・編集後記